

かしこいクルマの使い方

Vol.6

藤井 聡



お洋服と乗り物

今日一日、どのようなお洋服を着て
いましたか？

一日中家でゆっくりしていたなら、
気軽な格好で過ごしていたかかもしれま
せんし、「すぐソコ」にお買い物等で
お出かけするだけだったなら、やはり気
楽なお洋服を着ていたかも知れません。
ですが、それなりにきちんとした格好
をしていなければ何となく居心地が悪
い場所はあるのではないのでしょうか。
そんな所とは、どんなところなので
しょう。

おそらくは、「家の中」ではないで
しょうし、犬の散歩やジョギングで通
る「道路の上」や「近所の公園」でも
ないでしょうし、閉ざされた「クルマ
の中」でもないことでしょう。そして、
クルマを使って訪れるコンビニエンス・
ストアやスーパーも少し違うのではな

いでしょうか。

ところが、「バスの中」や「電車の中」、
「鉄道の駅」ではどうでしょう。
あるいは、バスや電車で訪れる駅前の
商店街や百貨店、あるいは、レストラ
ンなどではどうでしょう。多分、そう
した場所では、少しだけ、ちゃんとし
た格好で出かけよう、とお考えになる
のではないのでしょうか。

もちろん、クルマを使っても、
きちんとした格好でお出かけすること
はあるでしょう。でも、クルマを使っ
ている限り、そういう回数が減ってし
まうのではないのでしょうか。

もちろん、毎日緊張し続けるのは大
変なことです。でも、たまには、少し
お洒落でもしてお出かけるのも、楽
しいことではないでしょうか。せっか
くのお洋服も、それを着るための「ち
よつとした機会」が無いと、もった
ないかも、しれませんね。

△ふじい・さとく△

東京工業大学教授。1968年奈良県生
京都大学卒業。フジテレビ「交通バラエ
ティ・日本の歩き方」2003～200
4年を監修。JAFMATE「交通百葉
箱」2001～2002年に連載。主著
「社会的ジレンマの処方箋」

世界バス紀行



中村 文彦

バスを待つ間に

涙をふく、というような歌詞の唄が、僕がこどもの頃にありましたが、バス停というのは、決して快適な場所ではなく、バスを使うのが嫌になる大きな理由のひとつになっています。寒いとき、暑いとき、雨風の激しいとき、バスが時間通りに来ないとき、待つのはとても嫌なものです。

以前にもご紹介した、ブラジル連邦のクリチバ市のバスシステムでは、写真左のようなおしゃれなバス停があります。市内のもともとの路線はすべて車掌さんがいるバスですが、この路線は、車掌さんをやめて、すべてのバス停に係員をおきました。バス利用者は、バス停に入るときにお金を係員さんに払います。もうほとんど電車ですよね。でも、夜でも明るくて、必ず人がいて、それも両方向のバス停だから、二人は必ずいて、治安という意味も含めて、街の中のミーティングポイントのような役割です。

スウェーデンのイエテボリのバス（龍ヶ崎でいえばコミュニティバスのようなバス）では、スウェーデン語なのでわかりにくいですが（写真中央）、バス停といわずに本当にミーティングポイントと言っています。しかも番号つきです。



バス停の風除けの屋根（上屋）ももう少しお洒落になればと思っています。フランスのパリでは、写真右のように標準的な形態が決まっています、バス会社ではなく市役所のほうで整備しています。

日本でも、上屋については、変わったものがあります。どちらも長崎ですが、都市景観のことも考えると賛否両論ありそうです。

そして何も道路（歩道）上でまたなくても、病院の待合室、市役所のロビー、あるいはコンビニエンスストアで待っていて、バスが来るのを知らせてくれるだけで、どれだけ助かることでしょうか。いま携帯電話の機能などを活用して、そういう試みが少しずつ進んでいます。こういうのは日本が得意な分野なので、今後に期待ができそうです。



中村 文彦（なかむら ふみひこ）

横浜国立大学大学院工学研究院教授、
東京大学卒業。専門は都市計画、都市
交通計画、公共交通政策など